東洋紡株式会社 2026 年度 第 2 四半期決算説明会 質疑応答要旨

日時：2026 年 11 月 10 日（火）10:00～10:45

場所：WEB 形式

登壇者：社長 竹内 郁夫、執行役員 CFO 管理部門統括 高橋 秀和

本資料中の将来の業績見通し等に関する記述は、現時点における情報に基づいており、
当社として保証するものではありません。実際の業績等は、さまざまな要因により異なる可能性があります。

Q：フィルム事業の下期見通しをどう見ているか？

A：上期は、セラミックコンデンサ用離型フィルムなどの工業用フィルムを中心に、数量増に加えて価格改定も寄与し、売上高が増加した。下期については、包装用フィルムの需要動向や「コスモシャイン SRF」の新設備の立ち上げ・認証に伴うコストなどを織り込んでいる。

Q：包装用フィルムの価格政策と収益性をどう見ているか？

A：第 3 四半期以降は、原燃料価格が高止まるなか、販売価格の維持が重要と考えている。下期は需要の鈍化や競争環境の変化も見込まれるが、引き続き適切な価格水準の維持に努めていく。

Q：セラミックコンデンサ用離型フィルムの今後の成長をどう見ているか？

A：増設により拡大した生産能力を生かし、今後の需要拡大に対応していく。高付加価値品へのシフトを進め、プロダクトミックスの改善と数量増の両面で収益の拡大を目指す。

Q：医薬品製造受託事業の減損後の収益性改善をどう見ているか？

A：今回の減損を踏まえ、既存ラインの集約による固定費の削減など、収益構造の改善に取り組んでいる。新ラインは新規案件の立ち上げ、試験等が進んでおり、着実な受託を通じて、中期的な収益性改善を目指す。

Q：環境・機能材の下期の見通しは？

A：電子材料や半導体向けの数量増を見込む一方、中東情勢の影響を受けた海水淡水化用逆浸透膜の販売動向や、樹脂・ケミカルにおける原燃料コストの上昇などを織り込んでいる。また、VOC 回収装置の一部案件が来期へずれ込むことも見込んでいる。

Q：エアバッグ事業の収益性改善をどう見ているか？

A：今期は若干の赤字が残る見込みであるが、構造改革の進展により、来期は黒字化を見込んでいる。中期的に、資本コストを上回る収益性へと改善を図る。

Q：エルサルバドル子会社の事業休止に伴う今後の費用発生をどう見ているか？

A：11 月末をめどに事業を休止する予定であり、事業休止や会社清算に伴う一定の費用が発生する見込みである。

Q：今後、追加の構造改革が必要となる事業はあるか？

A：これまで必要な事業休止や構造改革を進めてきており、現時点で新たに大規模な構造改革が必要となる事業は想定していない。

以上